

## 校内別室指導支援について

### 不登校児童・生徒の状況

対象生徒は、第1学年である。これまで在籍していた小学校の環境とは大きく異なる本校に入学し、生徒数の多さや学校生活の仕組みの違いに大きな戸惑いを感じていた。

4月中旬以降から遅刻や早退が増え、教室に入ることなども難しくなった。

### 具体的な取組

当該生徒に寄り添った組織的な対応を以下のように行った。

4月

本校の不登校対策委員会にて、時差登校による支援を決定した。

5月

本校の不登校対策委員会にて、別室登校による支援を決定した。

6月

別室で過ごす際に、他生徒の視線が気になるという意見があったため、集中して学習に取り組めるように、ついたてを設置して、生徒の心理的負担の軽減を図った。

### 学習支援の充実

個別最適化された学習を実現するために、別室登校している生徒に対して、学習支援の方法として、一人一台学習用情報端末を活用して、端末に、AI型教材を通して学習できるように支援している。



### 成果

4月から7月までは遅刻や早退を繰り返しながらも別室登校をすることができていた。

学習面では、AI型教材を取り入れることで、計画的に学習支援を行うことができています。

### 課題

校内別室を利用する際に、自分以外の生徒がいても学習できるための環境整備や校内別室における生徒支援について、不登校傾向にある生徒へ周知方法に課題を感じている。

## 校内別室の運用について

### 不登校児童・生徒の状況

令和 5 年度の始業式には登校できていたが、その後は、登校できない状況である。当該生徒は、学校に対して「怖い」という思いがあり、自宅から出られていない。保護者は、校内別室の教室を実際に見てもらいながら学習等の支援について説明し、保護者の理解を得た上で、保護者からも生徒に校内別室の利用を促していった。

### 具体的な取組

(1) コーディネーター担当教員を中心に 10 名の支援員をお願いして、1 日 2 名体制で校内別室の運営に当たっている。支援員間で、情報共有するために連絡用ノートを作成し、支援の様子が分かるように引継ぎすることで、継続性のある支援の充実に取り組んでいる。

(2) 4 月以降、不登校生徒の状況把握を行い、速やかに学習支援が行えるようにした。校内別室が生徒にとって安心できる場となることを最優先とし、生徒の見守りを実施した。生徒が自発的な学習に向かう場合には、適切に学習支援ができる体制を整えた。

(3) 支援員が担任、SC、教員等の助言を受け、情報共有を図りながら、全ての不登校生徒が校内別室に登校できるように取り組んだ。



(4) 教室の配置に配慮して、個別学習が安心して行えるように、机と間をパーテーションで仕切って個別学習の場を確保するとともに、中央で利用生徒同士が話し合うことができるよう、テーブルも用意し、個別支援、グループ交流のどちらの支援を選択しても対応できるようにした。

### 成果

利用生徒が、不登校状態となる前に、別室などの対応を行ったことで安定して、学校に登校することができた。

不登校となった生徒の多くが不登校状態を長期化させることなく、安定して登校できるようになった。

### 課題

支援員によって、別室を利用する生徒に対する支援に差があるため、統一したし指導が行えるように取り組んでいく必要がある。